

令和元年 京都市文化財保護課 発掘調査

へいあんきゅうだいにりないかくかいろう 平安宮内裏内郭回廊跡 現地説明会

日時：令和元年8月18日（日） 10：00～12：00

担当：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 今回の発掘調査について

平安宮内裏跡は、京都市上京区田中町・小山町・東神門町・下丸屋町を含む範囲に広がる周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です。

主に、天皇が日常生活をすごす区域で、中央政府であった朝堂院の北西に位置します。周囲を築地塀（外郭）と回廊（内郭）で二重に囲み、その内部には天皇が政治を行う紫宸殿、日常を過ごす清涼殿のほか、麗景殿や弘徽殿など後宮を構成する建物が配置されていました。

内裏跡ではこれまでも発掘調査が実施されており、現在では、その一部が史跡として指定されています。京都市では平安宮跡全域を重要遺跡として認識し、通常よりも厳しい基準に則って、文化財の保護に努めています。

今回、内郭回廊跡と想定される地点において住宅の建設が計画されたため、京都市文化財保護課が発掘調査を行うこととなりました。



2 内裏内郭回廊とは…

内裏の内郭回廊は、築地をはさんで両側に通路を作る構造（複廊）で、両側の柱列が屋根を支えていたと考えられます。足元は一段高く成形され、両端には凝灰岩を用いて組んだ基壇がありました。またその外側に、河原石を敷き詰めた雨落溝がめぐっていました。その規模は、幅約10m、南北約216m、東西約174mに及びます。

内裏跡では早くから建物位置の想定復元が行われており、これを参考として発掘調査を進めてきました。内

郭回廊跡は、1963年に下立売通の下水道工事において石列や基壇とみられる凝灰岩が発見されたこと、続く1969年と1973年に行われた発掘調査により、基壇の石列が連続して検出されたため、西限ラインが確定しました。また、1994年の調査により、西回廊の東基壇（内裏の内側）とこれに沿って設けられた雨落溝が確認されたことから、回廊の幅が明らかとなりました。

また、1979年に今回の調査地の北側において行われた発掘調査では、回廊の下を通る水路が発見されました。側石に凝灰岩の切石を据え、底には河原石を敷き詰めた丁寧な作りの遺構で、平安宮内でも大変珍しい例として話題となりました。ただし、遺構の残存が一部に限られたこと、また他に出土例がないことから、この遺構がどのように連続するのかが不明のままです。



3 発掘調査の成果

今回の発掘調査は、1979年の調査地の南隣接地にあたります。通路に沿って調査区を開口したところ、北側で見つかった水路とほぼ同じ位置に、同様の遺構を確認しました。凝灰岩製の側石は、最大長70cm、最大幅40cm、最大厚15cmを測ります。上方にやや開くため、内のは40～45cmで、この規模も既往の事例と合致します。以上のことから、両者は同一遺構であり、回廊の下を通って南下して内裏外へ続く可能性が高いことがわかりました。

なお今回1区として調査を行っている地点では、内郭回廊南限の検出が期待されます。現時点では、凝灰岩の切石を据えた溝（平安時代末期頃）を確認しています。



図1 平安宮跡位置図

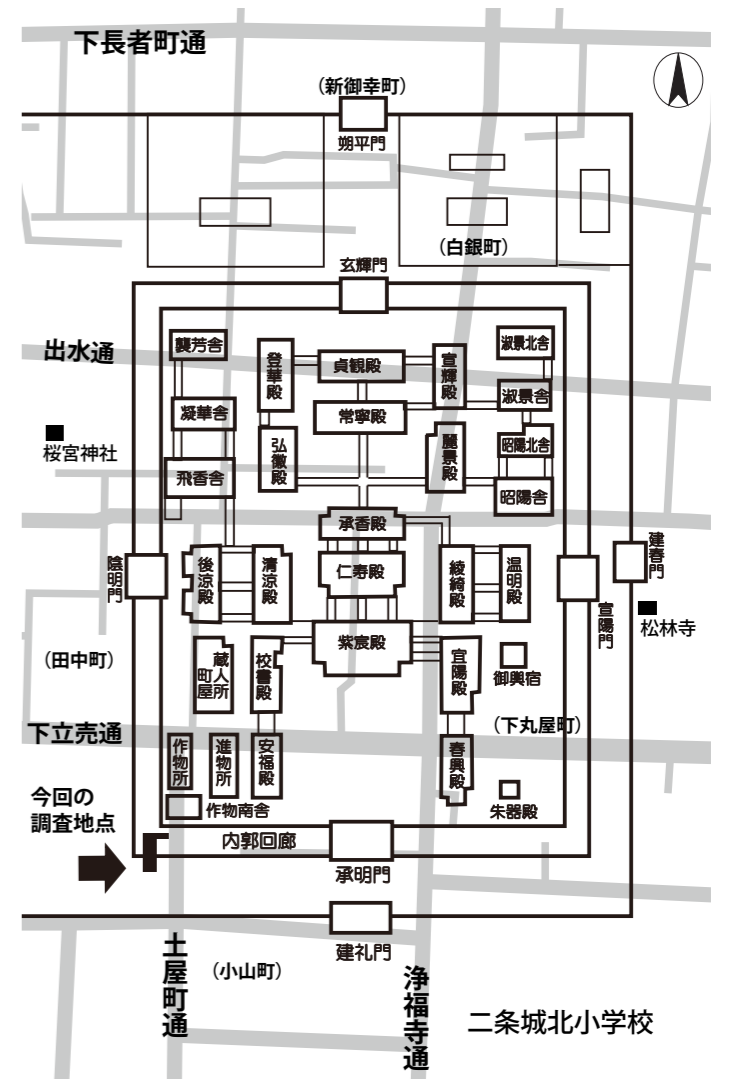


図2 内裏位置推定図

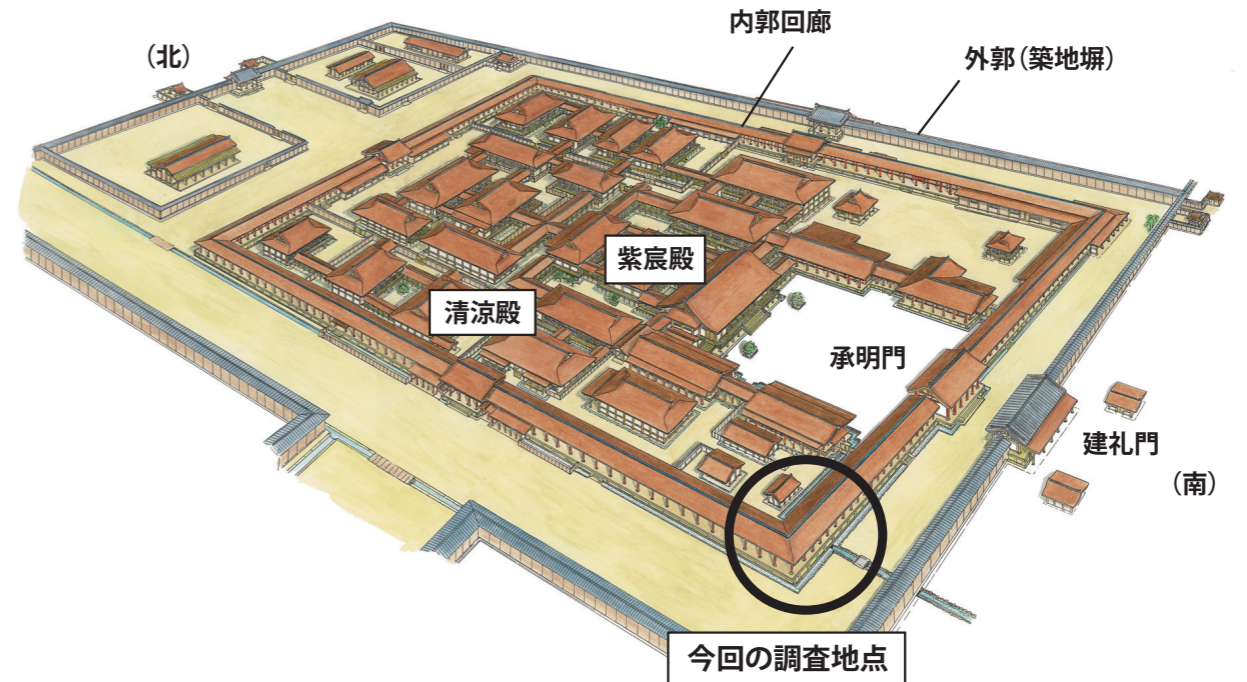


図3 内裏内郭回廊復元図（梶川敏夫（原画）に加筆）

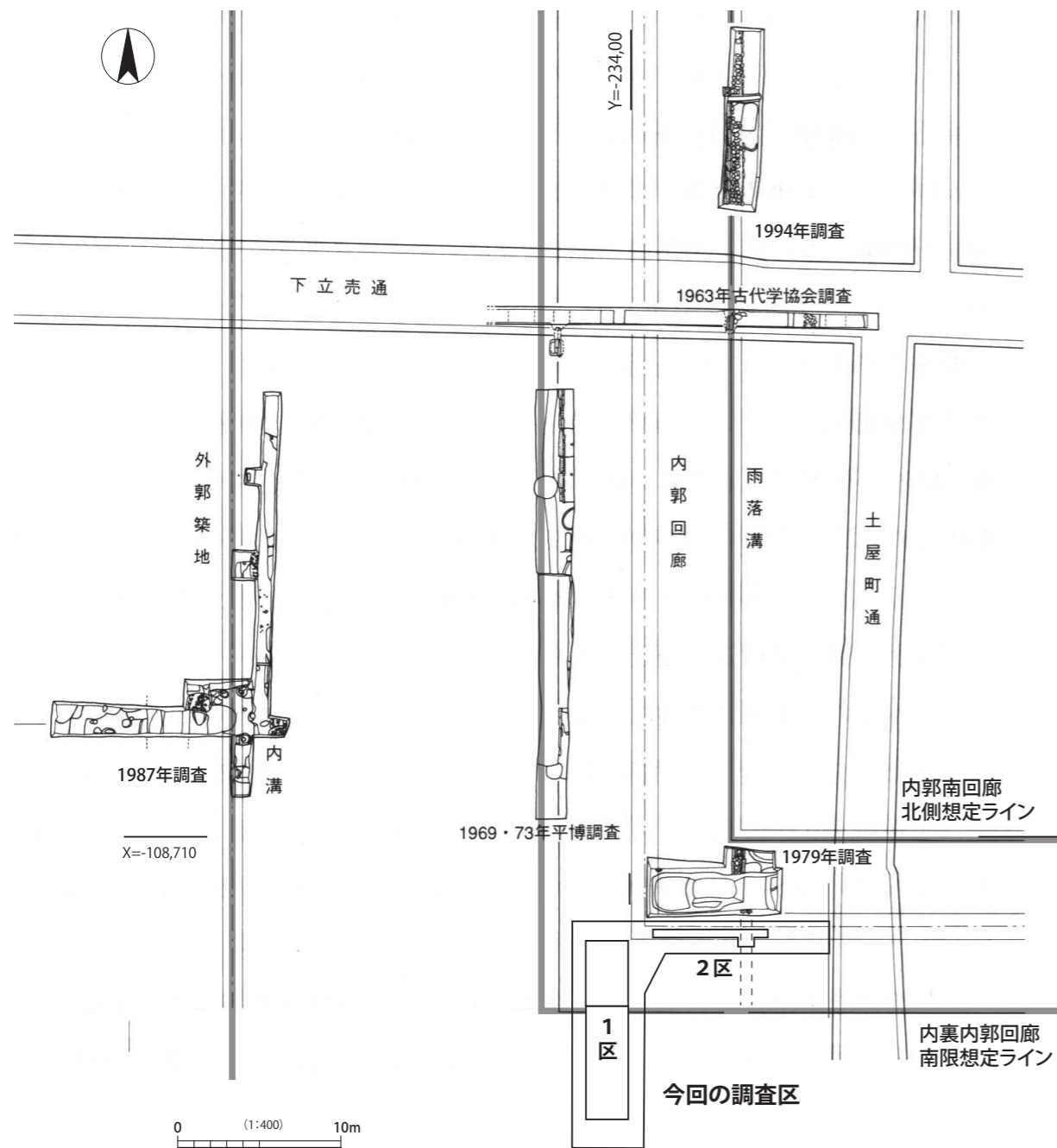


図4 調査区位置と既往の調査成果

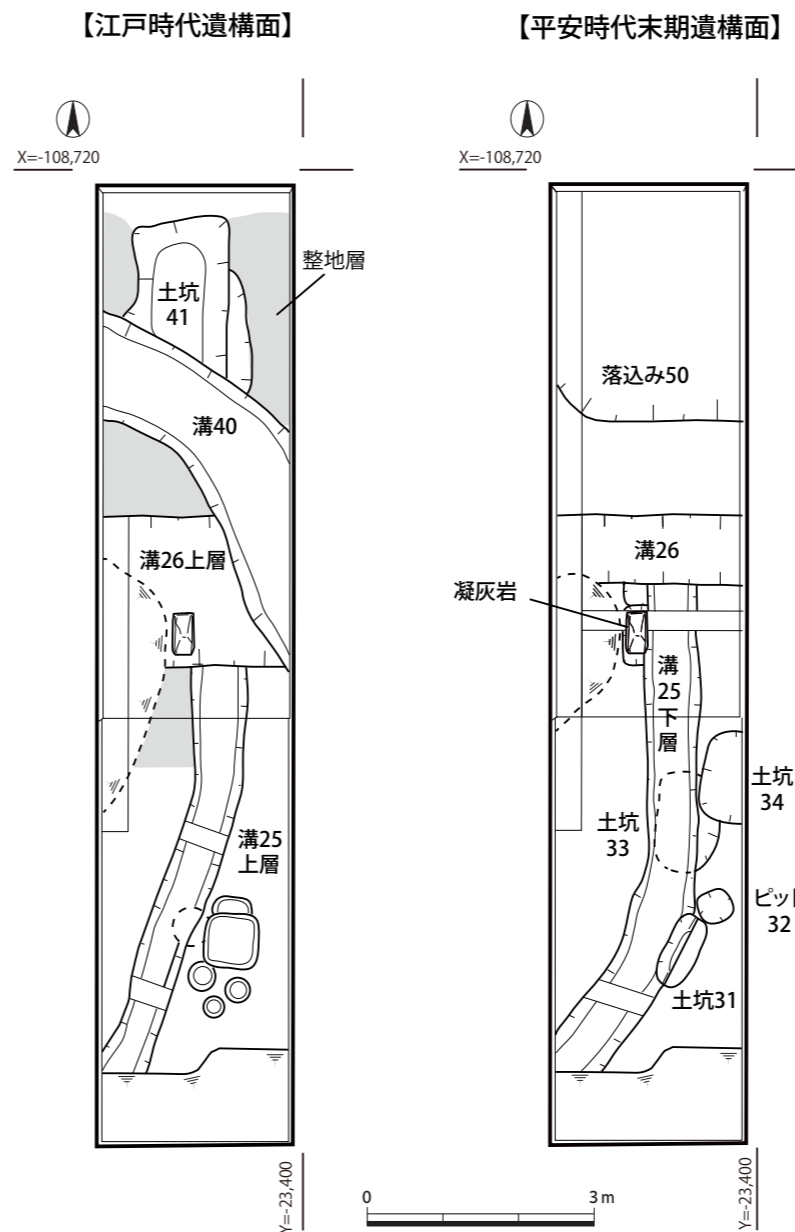


図5 1区遺構面全体図



写真1 1979年調査で出土した水路跡

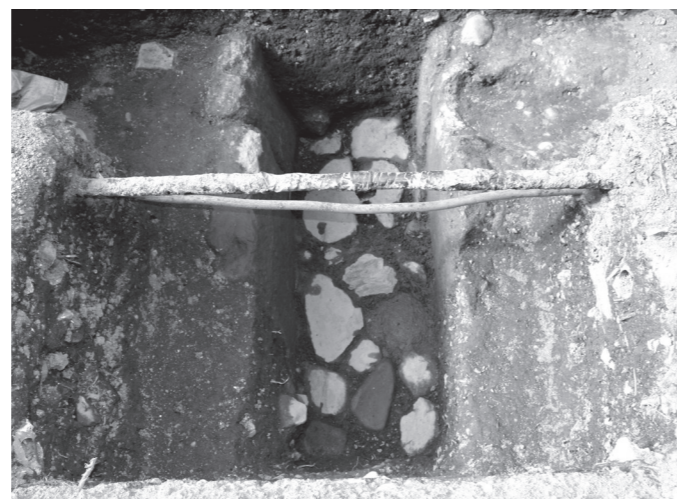


写真2 今回の調査（2区）で出土した水路跡



写真3 1区江戸時代遺構面検出状況

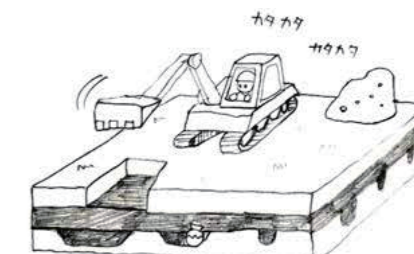


【解説】 発掘調査のすすめかた

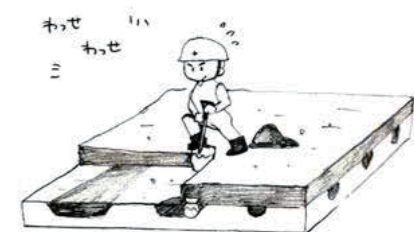
現在、発掘調査は進行中です。地域の皆様には、日頃より御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございます。

発掘調査は以下の方法で進めておりますので、ご不明な点がございましたら、お気軽にお声がけください。

なお発掘調査には、現場で土を掘る作業（現地調査）と、出土したものを整理する作業（整理作業）があります。双方の作業により得られた成果に基づき、適切な保護と活用を進めてまいります。



① 機械掘削……表面の土をショベルカーで掘ります。



② 人力掘削……人間の手で土を掘ります。



③ 遺構検出……土をけずって遺構をさがします。



④ 遺構掘削……遺構のなかの土を掘ります。